

講演①

神楽の世界と「もらい受け」の世界

教学研究所第1部所員 白石淳平

●はじめに

この度刊行されました紀要『金光教学』第56号に、「**「もらい受け」に窺う神々との交渉—村落祭祀における神楽の様相との関わりで—**」と題した論文を発表させて頂きました。本日は、その内容の紹介をしつつ、研究に向かう上での関心や動機、そして実際に取り組んでみて、改めて今思わされていることなども、少しお話しできたらと思います。

タイトルにもありますように、この研究では、「覚書」安政五年の、いわゆる「一乃弟子**もらい受け**」について、当時の大谷村の村祭りでも営まれていた神楽のありようを重ね合わせながら考えてみる、という試みをしました。

ご存知の方も多いかとは思いますが、金神と天照皇大神との問答を伝えた「もらい受け」とは、こういうものです。

- 天照皇大神様、戌の年氏子、私にくだされ候。
 - へい、あげましょう、と申され。
 - 戌年、金神が其方もろうたから、金神の一乃弟子にもらうぞ、と仰せられ。
 - 金神様、戌年あげましょうとは申したれども、えい(よう)あげません。戌年のような氏子は、ほかにござりませぬ。
 - それでも、いったんやろうと言うてから、やらんとは、いつわり。ぜひもらいます。おしければ、戌年の代わりに、せがれ巳年(浅吉)成長仕り、お広前まいらせますから、くだされ。
 - さよう仰せられますれば、あげましょう。
 - くだされれば安心仕り候。
 - 戌の年、母、家内一同へ申し渡し。一乃弟子にもらうというても、よそへ連れて行くのじゃない。此方で金神が教えるのじゃ。なんにも心配なし。午九月二十三日。
- (「金光大神御覚書」安政5年旧9月23日の条、『金光教教典』19頁[改行、丸印は引用者])

声を出して読み上げてみると、何だか自分が講談師か何かになったように感じられてくるというか、それほどに、この「もらい受け」という出来事そのもの、場面そのものの力に引き込まれていく気がいたします。そう言えば以前、このような教学講演会の場で、教祖研究の大先輩である早川公明先生も、「立教神伝」を浪曲風にアレンジするという試みを紹介され、「物語る」ということの意義について仰られていたことを、今改めて思い出したりもします。このように、「覚書」に向き合っていますと、不思議と、そこに記された場面の、まさにその物語られるありように、何か一つの文芸作品のような、語られる言葉の意味内容以上に迫ってくる力を感じることが、ままあるわけです。

●諸文芸が地方の村落にまで広く浸透していた「覚書」の時代

そうしたときに、「教祖」と後の世から仰がれる赤沢文治が実際に生き、そして「覚書」の舞台となった時代を思い浮かべてみますと、歌舞伎や浄瑠璃等の諸文芸が、地方の村落にまで広く親しまれていたということに、改めて注目させられるわけです。

そのような時代の雰囲気と文治との関わりは、例えば、近藤藤守師の伝承に、宴の場からもれ聞こえる歌や浄瑠璃にじっと耳を傾け関心を寄せていた文治の姿から示唆されますし、あるいは、昨年新たに収集された資料の中の「宅吉筆写帳面」、これは同じく

本号掲載の岩崎論文に詳しく紹介されていますが、そのいわゆる「別の帳」にあたる部分には、文政十年、氏神の祭日に催された芝居において、当時十四才であった文治自身が演じ手となり「千両役者」と褒められていた、という内容も見られます。

【『資料 金光大神事蹟集』三四〇(言行録八〇四):近藤藤守の伝え】

古川に宿りて、信者が歌い、舞う、踊る、浄瑠璃を語る、三時頃迄も大騒ぎをなしたる事あり。翌朝、一人にて早く参りたるに、「近藤さん、昨夜は賑やかであったのう。」「誠におやすみの邪魔を致しました。」と申したるに、「私は面白くて、あそこ(縁端)まで行て、十二時迄聞いて居った。」と仰せられたり。

【「別の帳」(部分:解説白石)】

文政十丁亥年九月氏神賀茂宮

祭に小田へ芝居いたし、子に願ひ、私参り。

いもせ山の四段目、ね太郎、お三輪、始め私に。

一四才の歳。私は籠七になり。四人の内では、

千両役者と人に褒められ。

*「いもせ山」…浄瑠璃・歌舞伎の演目『妹背山婦女庭訓』

*氏神祭で芝居を演じ「千両役者」との評判を得た文治

近藤藤守の初参拝は明治十四年とされていますから、文治の生きた時代、それこそ少年期から晩年にいたるまで、様々なかたちで諸文芸に親しんだであろうことが想像されます。

● 移り行く時代社会／神との関係の模索に端を発する文芸・芸能

さらに、今回の論文には出しておりませんが、明治五年旧暦十二月の、「覚帳」「覚書」両方に出てくるお知らせで、旧正月を迎えるにあたっての心構えのようなものを事細かに指示したものがあります。

【明治五年旧十二月のお知らせ(部分)】

一つ、物見聴聞のこと、むたいにとび出な。時の見合わせでまいり。世間の人は命延ばしと申して出。此方には神がおるから、命延ばしにはおよばずこと。

実は4年前の論文で取り上げたこともあるのですが、例えばそこには、「一つ、もちつき、注連かざりは此方にはいらす[…云々]」というような指示が八項目ほど続きまして、その一打ち書きの最後に、「一つ、物見聴聞のこと、むたいにとび出な。時の見合わせでまいり。世間の人は命(みょう)延ばしと申して出。此方には神がおるから、命(みょう)延ばしにはおよばずこと」とあります。「物見」は見世物や芝居を見物すること、「聴聞」は、浪曲や講談などを聞くことで、「命延ばし」とは、「命の洗濯」と同じような意味です。つまり、日常の労苦から解放されて、寿命が延びるほど気ままに文芸や芸能を楽しむ、という当時の娯楽のあり方が窺えるわけですね。お知らせは、維新の変革における改暦によって、二重のお正月を向かえることとなっていた、当時の動揺や不安を浮かばせるわけですが、そのような時代状況にあって、様々な文芸・芸能に触れるということが、人々にとっていかに癒しとなっていたか、ということも思われます。「むたいにとび出な。時の見合わせでまいり」ですから、「絶対に行っちゃダメ」ではなくて、「むやみやたらに行かず、ほどほどに」くらいのニュアンスでしょうか。それほどに、諸文芸が一般に深く浸透していた時代であった、ということでしょう。

さて、ここに、「覚書」の「もらい受け」と、神楽という神事芸能の様相を重ね合わせて考えてみたくなるポイントの一つが浮かんできます。幕末維新という大変な時代にあって、人々の不安や動揺を和らげる娯楽であった諸文芸なわけですが、同時にそれは、そうした諸文芸が、常に、移り行く時代社会を生きていく人間の切実な日常に接するところに展開してきた、ということを考えさせるのであります。

●時代社会へ向けての「もらい受け」のインパクトとは？

そしてさらに、そうした文芸や芸能がそもそもは、村々のお祭りの由来としての神話、すなわち神語りに端を発しているとされ、現実を生きていく人間における、神との関係の模索に生じた営みであったことを思い合わせると、そのようにして人間の生を支え続けていく構造としての、〈物語〉という問題への関心が浮かび上がってくるわけです。

そこで取り上げたのが、そうしたありようを顕著に浮かばせ、村々において伝えられてきた、神楽という営みです。村落祭祀における重要な神事芸能として営まれ続けてきた神楽は、当時、歌舞伎や浄瑠璃の影響も受けつつ、また、中世以前に遡る神話や説話等を取り入れながら展開していました。それは、時代を越えて伝承されてきた神楽の神語りが、その時代社会に生きていた人々にとっての、神々と関わる生活世界の問題を、目に見える以上の奥行きや幅をもって湛えているということを示唆しています。そうした神楽のありようを重ねながら見ていくことで、改めて、その当時の時代社会へ向けての、「もらい受け」のインパクトを考えてみよう、ということなのです。

●神楽における金神の登場

というのも、当時、この大谷村でも定期的に神楽が奉納されておりました。そして実は、この地方の神楽奉納を代々担っていた佐方村の社家に伝わる神楽の一つには、「金神」という神が登場しているんですね。

(表紙)	(丸印)	笠原家 知事	(丸印)
天磐戸開神能書			
戸隠山神前磐門能			
天津神天乃石窟仁入堅テ世波常閉止 成ソ悲哉			
〔*中略：以下、岩戸から天津神（天照大神）が出た後の、終幕における手力雄命と鬼神の間答〕			
手力雄命曰			
石窟乃中仁居波何者哉			
鬼神答			
我波右乃眼波月光左乃眼波日光 右手仁八咫鏡左手仁十寸ノ鏡			
手力雄命			
曾札波伊弉諾伊弉冉尊乃事			
オオウツ 大虚 タレナ			
鬼神曰			
鼻ノ長サ七咫、背長七尺餘リ口尻			
テレ 明久耀利何			
手力雄命			
曾札波猿田彦命ノ事明白仁申世			

鬼神曰		青山乎枯山仁須ルナリ
手力雄命曰		曾札波素戔嗚尊乃事体言乎云ナ
鬼神曰		我波十六天乃魔王ナリ神國乎魔國ニ
手力雄命		世
鬼神曰		石窟ヨリ引出シ一寸ハ仁伐リ平ケン
手力雄命		我ヲ助給ク止申須
鬼神曰		某仁随仁於ハ金神止祭り良定座
手力雄命		月金神日金神七殺金神止唱齊故仁
鬼神曰		幾万歳仁至迄百姓乎守護給江
鬼神曰		恐入畏テ候
鬼神曰		右ハ日神御出頭鬼神ハ金神止祭り
鬼神曰		思兼手力男親子ノ神忠臣至極事
鬼神曰		天保十一子年十一月吉日
鬼神曰		神楽幕元神田譲リ請次
鬼神曰		笠原相勤社中門弟数多アリ
鬼神曰		笠原肥後頭代ヨリ

現在でも多くの神楽で演じられる代表的な神楽の一つ、岩戸開きの舞です。ご存知の通り、天岩戸の日本神話を基にしたこの神楽は、天照大神が岩戸から出てきておしまい、となるのが一般的です。しかしこの台本では、そうした一般的な終幕に加えられるかたちで、金神という神に関わる内容が展開されています。該当部分の内容を見てみます。

天照大神が外界へと再臨します。しかし、岩戸の中に未だ何者かが潜んでいることに手力雄命が気付いたことから、鬼神との問答が始まります。何者か、との問いに繰り返して、鬼神は、「伊弉諾伊弉冉尊」や「素戔鳴尊」といった偽りの神名で答え続けますが、ついに「十六天乃魔王」であることを明かし、八つ裂きにしようとする手力雄命に助けを乞うこととなります。それに対して手力雄命は、自分に随うなら金神として良に座を与えるので、今後は「月金神日金神七殺金神」と唱えられる祭祀の対象となって百姓を守って下さい、ともちかけます。そして鬼神はそれに恐れ入り畏まり、もって百姓の守護が約され、終幕となるわけです。

論文では、金神が登場するこのような神楽の由来を尋ね、そこに浮かぶ様相が現実の村落生活にどのように関わっているのかという問題を、金神と天照皇大神との問答としてあらわされた「もらい受け」に振り向けつつ考えてみました。

●村落共同体との関わり

その内容をかいつまんで紹介していきたいと思うのですが、当時大谷村では、五穀豊穡等の祈願のため、氏神社の祭礼、また荒神神楽や荒神舞といって、村内各地に点在する荒神社のお祭りで神楽が奉納されていました。天災などに見舞われた時に、臨時で仕えられることもあったようです。庄屋の文書によると、小野家のあった津谷の荒神社では、ほぼ五年を式年として神楽が営まれていたことが分かります。文治もまた、本谷の荒神組に属していました。現在も、西側(にしひら)の墓地と早馬神社に挟まれるかたちでその社殿が残っていますが、その案内板にもあるように、当時荒神社は、今で言う地域の集会所のようにも使われていました。荒神様のお祭りの際には、田畑の水当番を決めたり、色々な相談事が持ち寄せられたりしていたんですね。文治自身も、そうした当番を務めていまして、荒神組での祭祀を通じて、村の運営にも深く関わっていたであろうと考えられます。このように、当時は、村の共同体運営と荒神組などの祭祀が深く結びついており、その中での、神楽の奉納だったというわけです。そして、そこで奉納されたであろう神楽に、金神が登場していたということになります。

●神楽における金神登場の由来から

さて、そうした神楽の由来、成り立ちを辿っていくと、面白いことが見えてきます。例えば問題の岩戸開きの原型は、近世前期頃までは、中世神道説に基づく穢れを清める神楽であったとされ、記紀神話とは違う内容だったというんですね。その名残が一部の地域に残されていて、それが、仏教の天部の一つで、天照大神と対置されることの多い、「第六天の魔王」の登場という要素です。この第六天の魔王が、さっき出てきた「十六天の魔王」、すなわち金神へと祀りかえられる鬼神であろうと推察されるわけです。

そしてさらに、この地方の色々な神楽の源流を尋ねていくと、その背景には、土公神、堅牢地神、龍王、盤古大王といった、金神と深い関わりがあるとされる神々の存在が浮かんでくるわけです。

なお、当時の神楽演目のうち、神代神楽と言われる岩戸開き・国譲り・大蛇退治は、記紀神話をもとに江戸期に創案されたものでして、現在に伝わる備中神楽は、この神代神楽と、それ以前の神楽が合わさったものとされています。つまり、神楽のなりたちには、記紀神話になぞらえて神楽が作り直される以前における金神のリアリティが示唆されるのですが、このことから、長い年月をかけた様々な神との関わりを思わされると同時に、それが、近代へ向かって、段々と、記紀神話にそったかたちへと変容し

ていく過程でもあることが分かってきます。そして、中央権力による支配の影響も相俟って、金神や魔王が登場する岩戸神楽がほとんど見られなくなっていく中で、文治の時代のこの地方の神楽は、天照大神をはじめ、記紀神話の神々の語りにシフトしつつも、なお、それ以前の古いかたちを残していた、ということが浮かんでくるわけです。そのようにして、村に生きる自分達の由緒、起源を辿りつつ、共同体の結びつき、繁栄が祈願されていたんですね。

●「もらい受け」へ振り向けて — 隠居・伊勢信仰との関わり —

では、「もらい受け」が、金神と天照皇大神との問答として告げられているという点を、以上述べてきたような、神楽の神語りと村落共同体のなりたちとの深い関わりの様相に振り向けてみるとどうでしょうか。

「もらい受け」の中で、「せがれ巳年成長仕り」と出てきますが、ここには、天照皇大神から金神に「もらい受け」られることと、浅吉への世代交代の問題との関連性が示唆されます。このことに関わって、養父の病死によって文治自身が家督を継ぐ天保七年は、天災による大飢饉に見舞われており、また神楽の式年にも重なっていました。家督の相続以降、文治は庄屋の遣いなど村の公務に人一倍出仕していきます。そして、浅吉に家督を譲る安政六年もまた、同三年の天災による被害を引きずって、村の農業収益は厳しい状況でした。その安政三年も、神楽の式年に重なっていました。そうした状況にあって、共同体運営に深く関わっていた文治が隠居をするということの、村にとっての問題の大きさを思わされるわけです。そして、村落共同体の一員であり氏神の氏子であることが、すなわち天照皇大神の氏子であることを意味したということからは、金神と天照皇大神との問答によって文治は、神の眼差しを自身の浅吉への眼差しに重ね合わせつつ、自分自身の、村の一員としての来歴をも見つめ返させられていたのではないかと、とも思わされてきます。

そこで見返されたのは、村落共同体のなりたちを支える、神々との関わりの実現の様相なのですが、では、なぜそれが金神と天照皇大神との問答という、神語りの眼差しから見返されなければならなかったのか。そこにもう一つ、天照皇大神との問答のポイントが浮かびます。それが、伊勢への参宮や、伊勢から村に巡回してきていた御師との関わりです。「お広前まいらせ」ということから言えば、伊勢参宮がまず思い浮かびますが、それ以上に、家督の相続に伴って、養父から文治へ、また浅吉へと受け継がれていた、伊勢御師による札配りの随伴等の役割は、当時において、村の安寧を支える神の加護に与る、大事な営みの一つだったわけです。

● 村落社会・神仏世界相互の転形

そうすると、なぜその営みが問いに付されなければならなかったのかが、さらに問題になってきます。ここに、金神が登場する神楽のなりたちに浮かぶ、神語りの変容過程が重なって見えてきます。というのも、幕藩体制下にあった当時、村落共同体を成り立たせていた、一村一社という枠組での氏神氏子制は、中央権力による領地支配の単位とイコールでした。そして、そうした支配機構が、村々の祭祀権の統制を通じて整備されていったということは、村の安寧を支える神との関わりが、権力支配によって変容を迫られつつ、一方で、神、特に総鎮守としての伊勢天照皇大神宮への祈願が、逆に支配権力を支えていくことにもなるという、いびつな状況としてあったことを意味しています。こうした状況はさらに、明治期の変革に向かって拍車がかかっていくこととなります。つまり、村落共同体のなりたち自体が揺るがされていく当時の危機的状況は、そのなりたちを支えていた、神々との関わりの世界の変容、揺らぎを同時に浮かばせていた、ということです。このように、神語りの変容の問題に密着した構造として、金神と天照皇大神との問答という〈物語〉が見返させたのは、人間が現実に生きていく、時代社会の

移ろい、揺らぎの方だったと捉えられるわけです。

と同時に、変容を迫られる神楽の神語り、そして「もらい受け」の問答が、共に、記紀神話の神と金神との対置という話型を共有していることから、遙かな神話の歴史に関わり続けてきた金神という神の揺るぎない存在感も、そこに確かめられるように思っています。そしてこのことは、村落共同体の危機という、人間が直面する現実の亀裂にあっては、支配機構を支える記紀神話の神のみでは足りない、より根源的な神の守護が求められる、という問題に通じていきます。

●揺らぐ現実社会を異化する神的世界からの眼差し

こうして見てくると、文治における金神との関係の深まり、つまり、「一乃弟子もらい受け」は、記紀神話の神統譜に回収できない余剰としての、助かりへの切実な希求をも抱え込みつつ、人間の生を支える神々との関わりの歴史的全体性から、揺らぐ現実そのものが捉え直される出来事として迫ってくるように思われます。そしてさらに、そのことが、文治という一人の人間をして人生を見返させることに直結していたということは、村落に根付き生きる人間の生を支える神の眼差しが、現実へ向けて、目に見えるかたちで示されることでもあったのだ、と気付かされるわけです。

以上のように、「もらい受け」は、時代社会の移りゆきの中で、人間の生を規定する構造がどのように揺らごうとも、そこから絶えず立ち上げ直され得る助かりの世界への、その回路を指し示す神々の語りとして、神との関わりの確かさ、そして豊かさを、今もなお我々のもとへ届け続けているように思います。

●まとめにかえて 一神との関係への問い―

今回この講演会に臨むにあたって、自分の研究を改めて振り返りながら、神楽や物語という視点を取り入れることとなったちょうど二年半程前、当時3才だった長女が入院した時のことを思い出していました。

ちょっと珍しい病気で、急なことであったので親子共々色々しんどかったのですが、その入院中、娘の元気を支えてくれたのが、女の子が変身して悪と戦う、『プリキュア』というアニメでした。実は、こういう現代のアニメにおける変身というモチーフもまた、中世以前の説話などに通じる話型なんですね。現代にあっても、様々な問題に出会いながら生きていく人生の上で、変身物語というのは、人々を勇気付け続けているんですね。

娘も、自分がプリキュアになったつもりで病気と闘っていたわけですが、その娘が、退院して金光の宿舎に帰る道すがら、車の窓から外を見つめて、「お外の世界がはじめてみたいでキレイ！」とすごく感動してたんです。その時ハッと思わされたんですね。変身変身と言うけれど、実は変わっているのは人ではなく、世界なんじゃないか、大事なものは、世界の方の変化なんじゃないか、ということです。

旅人が実は神仏の化身だったというように、古来より語られてきた変身物語は、助かりを求める人々が直面していた、世界の方の問題を照らし出しています。そして、変身というかたちでの神仏の顕現は、そのまま、その世界自体が、新しく支え直されるということの意味していたのだと思います。実際、私や奥さんもまた、娘の闘病に立ち会うことを通じて、自分達を取り巻く世界が劇的に変わって見えたように感じました。

さて、この度の論文では、神楽のありようを重ねながら、「もらい受け」について考えてみたわけですが、これまでこの「もらい受け」は、文治の信心が次第に進んでいき、やがて本教の教祖となっていく上での画期、転換点として捉えられてきました。例えば、村落共同体からの、従来の氏神信仰からの「離脱」といった説明がなされてきたわけですが、それはつまり、既存の社会や信仰との違いによって、この道の信心の独自性、あるいは必然性や正当性を説明するということであり、その論理的要件としての「もらい受け」であった、という理解の仕方だと思います。しかし、神楽のありようを重ねつつ、

〈物語〉としての意味を探るといふ試みからは、そうした、文治一人の信心の進展や、本教信仰の確立というような、歴史的な因果関係とはまた別の、「なぜ？」という問いの深みに引き込まれていきます。

精神病理学者の木村敏という人が論じていたのですが（「物語としての生活史」〈木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈つくり〉—臨床哲学の位相—』河合文化教育研究所、二〇〇九年））、物語の構造というのは、ストーリーとプロットに分かれるといいます。ストーリーは、物語の内容であり、その展開で、そこには、「それからどうなるの？ どうしてそうなったの？」というような問いが向けられます。一方プロットは、そういったストーリーの展開自体を深いところで支えている、目に見えない構成や仕組みのことで、「なぜ？」という問いが向けられます。

結末も話の筋も分かっている推理小説を何度も読みたくさせるのは、この、プロットへの問いが関わっている、というんですね。そして面白いことに、プロットという言葉には、陰謀や策略、計画という意味もあるらしいんです。つまり、「なぜ？」という問いは、過去との因果関係、原因を突き止めて済まされる問題ではなく、まだ見ぬ未来へも向けられている、というわけです。

人の人生もまた物語に例えられますが、その人生を未来へ向けて駆動させていく推進力としての、「なぜ？」という問いの力、そこには、神様への信心が深く関わっているように思われるのです。その意味でそれは、「人間は、どうして生まれ、どうして生きているか」というような問題にも関わるような、私という一個の人間の事柄におさまらない、この世界そのもののあり方、天地の開け方へと通じていく、神との関わりへの問い、ということなのではないでしょうか。

新たな解釈への絶え間ない模索は、移りゆく時代社会にあって、今ここに「覚書」が差し向けられている意味を、世界の助かりへ向けて問い続けていくことに通じているとの願いをもって、ここからより一層、求めてまいりたいと思います。